

提唱 槐安国語鈔講話(九)

頌古

第六則 保福遊山

白田 劫石

垂示に日く、靈光不昧 万古の徽猷^{きゆう}、学道の門 大疑
凝結に超え得る無し。須らく知るべし、疑團は入道の羽
翼なることを。

たとえまた大疑現前して見道分明なることを得去るも、
見地透脱の時を得ることはまた大いに難し。

見地透脱せざるときは則ち歩驟^{ほしゅう}高からず、格調鄙俗に落
つ。

老僧行脚の時、二十年錯って等閑の会を作^なし了ることあり。
後来不合に撞着す。一身の白汗を滴尽する底の大事
なり。

作麼生か是れ見地透脱の人？

本則は、雪峰下同參の保福・長慶・鏡清^{きやうしやう}の三長老の遊山につ
いての商量である。

古来禅門の修行は、疑を以って則となす、疑わざる是れ病なり
と言われる。

壁に向ってただ黙って坐っているのでは、業識性を打破して見性
悟道することはできない。

どうしても仏祖の機縁である古則公案に参じ、大疑團をおこし

て通身これ疑のかたまりとなつて、打成一片熱鉄丸のように命がけで工夫三昧に打入しなければならない。

大疑団こそは、大信根・大勇猛心とともに、修行の必須の要件である。

この垂示の「靈光不昧 万古の徽猷、学道の門 大疑凝結に超え得る無し」とは、これを言うた。

「靈光不昧」とは、人々が本来具有している仏の智慧の光で、何ものによつても昧くらまされず、尽十方法界をあまねく照しぬいているとの意。「万古の徽猷」とは、万古不易の人生の指針。いかなる時代、いかなる社会においても、この靈光以外に真理の指針はない。

学道の門は、公案によつて大疑団をおこし、通身これ疑のかたまりとなつて工夫三昧に打入するのが古人の示す規矩であり、準繩である。

「須らく知るべし、疑団は入道の羽翼なることを。」

疑団こそは、一超直入如来地の大道に入るための車の輪であり、鳥の翼である。

以上が第一段で、まず明瞭な見地を得るために疑団の必要なことが示された。

次は第二段で、本則の宗旨を睨んで見地透脱を説く。

「たとえまた大疑現前して見道分明なることを得去るも、見地透脱の時を得ることはまた大いに難し。」

人間は、疑団によつて工夫三昧に入り、かじいつせいカ地一声 見性悟道しても、その得た仏智見というものにとらわれ、そこに尻を据えやすい。

しかしそれでは時々刻々に変転する万縁万境に対して、自由な働きをすることができない。どうしてもそこを脱却して、「見地透脱」のところに出不なければならない。

「見地透脱せざるときは歩驟高からず、格調鄙俗に落つ。」

歩驟高からずとは、念々正念 歩々如是と、一言一挙手一投足において如是法三昧の高雅な風韻を示すことができないとの意である。

よほど悲願が大で、勇猛心がないと見地透脱せず、多くは己が悟について舟を刻むことになりやすい。

そこで最後に白隠老漢は、己れの過ぎし日を顧みて白状された。

「老僧行脚の時、二十年錯って等閑の会を作し了ることあり。」

等閑の会とは、法の畏るべきことを識らず、一旦の所解に尻を据え、よい気になって得々とすることである。老漢も、二十年の間ここにどんばまったと言われる。まことに恐るべき陥穽である。

「後來不合に撞着す。一身の白汗を滴尽する底の大事なり。」

後に未だ業障が尽くされず、心々不異が実地にいけていないことに気がついた。ここを手に入れるために、古人は十年二十年三十年と市隠・山隠して光をつつんで聖胎長養された。これは、正念工夫相続の容易ならざる関門である。「一身の白汗を滴尽する底の大事」である。

本則の主眼は、正にここにあるぞと、本則を喚びおこした。

拳す、保福長慶と遊山する次で、福 手を以て指さして云く、只這裡便ち是れ妙峰頂！ 慶云く、是は則ち是、可惜許！

雪竇著語して云く、今日這の漢と共に遊山して何をか図る？ 復云く、百千年後 無しとは道わず、只是れ少し。後に鏡清に拳似す。清云く、もし是れ孫公に非んば、便ち髑體野に徧きを見ん。

保福 長慶と遊山する次で、福 手を以て指して云く、只這裡

便ち是れ妙峰頂！

保福と長慶と鏡清は、雪峰下の同参の長老で互いに肚知りあう同士である。

保福と長慶が遊山をした折に、保福が手で足もとを指さして、“只這裏便ち是れ妙峰頂！”と言った。

妙峰頂というのは、『華嚴經』の「入法界品」に出てくる須弥山しゅみせんの頂の孤峰である。

善財童子が五十三の善知識に歴参して最後に徳雲比丘を尋ねたが、七日参問するも逢えず、一日別峰にてフト相見したという。

「評」の中では「言思道絶す、故に妙といい、遙かに諸仏の境界を超出す、故に高という」としている。

「妙高」とも言われている。この因縁について白隠老漢は、「評」で次のように解説しておられる。

「蓋し善財童子は、行人弁道進趣の一念子なり。妙峰とは、第八阿頼耶の無分別識なり。徳雲比丘とは、根本無作の平等の大智なり。七日にして逢わずとは、七識摩那の伝送識なり。

行者単々に参究する時、思想尽き情念止み、陰々たる摩那の細念のみあって、一点の形団無く、一点の縦跡無く、虚索々空蕩々進むことを得ず、退くことを得ず、理尽き詞窮って、技もまた窮る処に到って、豁然として打発し来る。十方虚空無く、大地寸土無し。虚空の骨を拗折し、乾坤の髓を打出す。

通玄峰頂是れ人間の世に非ず。初めて知る、一切の衆生如来の智慧徳相を具することを。何ぞ図らん、徳雲比丘従来我と同体ならんとは。是れ則ち別峰相見の端的なり。」

保福は、『華嚴經』の「妙峰頂」というのは、ここのことであると指さし示した。

ここの下語。【徳霊比丘、眉 言の如く、相見従来別峰に非ず】徳峰比丘と白い眉のこの白隠とどこが違うか、また別峰とこの貧

乏寺とどこが違うか、一つとっくりと見てみよ！

慶云く、是は則ち是、可惜許！

さて長慶は、この保福に対して、どう言ったか？ 慶云く、“是は則ち是、可惜許！”それに間違いはないが、それでは折角の風韻が台無しじゃ、通棒を与えた。言葉は温和であるが、土性骨を叩き割る三十棒である。

これは、垂示の「見地透脱」の実境涯をかいま見せたものである。

全く言思が絶え瀟洒しょうしゃを絶した格調の妙峰頂の風韻は、まさに手の下しようもない。まさに可惜許！

ここの下語。【泣いて李陵の袂を把って、帰思襟うるおを沾さんと欲す】これは別れる二人の深い思いの一つであることを詠じたもので、任地に留る者も故郷に帰る者も、外形は全く違うが悲しい思いは一つである、保福長慶の肚は一つであるとの意である。別れの悲しい涙というところに深い仔細しさいが伺われる。

さてこの二人のやりとりを見た雪竇は、たまらなくなって口を挟んだ。

雪竇著語して云く、今日這の漢と共に遊山して何をか図る？

折角の遊山の中で、二人して何をやっているのじゃ。遊山のときは、無駄口をたたかずに静かに風流を味わうものじゃ。この抑下で、本則が生き生きしてきた。

ここの下語。【一善を廃するときは則ち衆善衰え、一悪を賞するときは則ち衆悪進む】どんな些細ささいなことでも言うべきときには言わねばならぬ。放置して見逃してはならぬ。よく言うた！

復云く、百千年後、無しとは道わず、只是れ少し。

今度はグルリッと転じて卓上した。さはさりながら、この二人、法のみあって身あることを知らぬ、見上げたもの、おかげで今日までその余慶に浴することができるというものじゃ。三十三天の

素天辺まで賞揚した。

ここの下語。【千金の璧を商^{あきな}う者は、肆^しに行かずして、觀んと願う者其の門を塞ぐ】真の宝玉をもつ者は、わざわざそれを売するために店にもって行かないでもいい。買い手の方が寄ってくる。ほんとうの人物の香は、隠れていても自然と顯われる。争えない。

さてこの保福と長慶のやりとりが鏡清の耳に入った。

後に鏡清に拳似す。清云く、もし是れ孫公に非んば、便ち髑體野に徧きを見ん。

これは鏡清が二人の肚を見て行^{おこな}った深切な断案である。孫公とは長慶のことである。“もしあそこで長慶が“可惜許！”という一語を吐かなかつたら、妙峰頂の見到死在して立枯禪の髑體になり下がってしまったであろう。まことに危機一髪であった。”

「見地透脱」の^{のし}ところの開示である。ここの下語。【相罵り相^{こん}詈って天明に到る。禪無くして猶草裏に坐する有り】夜通しつかみ合いの口論をしたが、夜が明けて自分の姿をみれば、ふんどしもせずむさむさしい草の中におるのが分かり、まことに羞かしい限りである。

本則の鏡清に当たっているが、保福と長慶にも及んでいる。妙峰頂の商量、お羞かしい極みであるとの拈語。

これで本則の宗旨が甦ってきた。

最後にここでこの則についての白隱老漢の「評」を掲げてみることにする。

「君看よ、古人的々分明 的々高雅なることを。

願うに、是れ十年二十年、丹^{たんこん}悃(まごころ)を滴^{さしやく}尽し、玄微を鎖鑰(とかす)し、見泥を洗滌し、真実究竟熟練し来る者に非ざるよりは、誰か能く此の極に到らん矣。

今時 往々八識頼耶の暗窟^{したため}を認め得て大悟なりと為し、向上の宗旨なりと為して諸方を併呑し、仏祖を軽忽する底、麻の如く

粟に似たり。知らず、幾重の面皮ぞや。

叢林各々此の弊風に吹倒せられて、春雪（楚の歌曲）大雅（読経の詩篇）の高韻、土を払って泯滅す。鄭衛（淫らな音楽）婢妾の姪声、雲の如く敷き湖の如く湧く。此の荒蕪（荒れ果てた姿）を顧みる毎に幾度か老涙、灯下に滴る。頼む所は、我が西東住庵の諸子、尽く是れ今時叢林の頭角（英才）四方の精英なり。...
...頭を此の陋巷寂莫の地に聚む。朝難暮辛 昼餒（飢える）夜凍、齒を切くいしばって死坐し、額を集めて苦吟す。.....此の刻剥（むごい零落のすがた）を見る者、誰か惨懼さんくせざらん。鬼神も涙を垂れ、波旬はじゆん（魔）も掌を合わす。

豈其れ苦学の功無からんや。必ず誓って孤危の真風を挽回し、仏祖の深思を報答せんことを要せよ。千万惟れ祈る。」

頌に曰く

妙峰孤頂 人到り難し

只看る白雲飛んで又帰ることを

松しょうかい 檜蒼々幾歳をか歴たる

莫さもあらばあれ 教 巖畔 鳥声の稀なることを

この頌は、仏も寄りつきえない妙峰頂の景観を詠じたものである。

妙峯孤頂 人到り難し

「妙峯孤頂」と、「孤」の一字を入れたが、これによって千鈞の重みを増した。ここのところは、言思を絶して、いかなる悟も届かない。いかなる神仏の信仰も届かない。ここには伝うべき法というものは、一法のかけらとてない。だから今までここに来た者は、誰一人としていない。

白隠老漢は、ここを「妙高」の山とし、『俱舍論』にその高さ

が「三百六万里」としてあるのに対して、「豎に三分三厘一才一毛、横に十方法界三界三世」と改めている。高さがあって、高さが無い。一微塵に収まるかと思うと、尽十方を貫通しているというのである。ここのところが「孤」たる所以である。

ここの下語。【山に上ること高からざれば、見ること遠からず。海に入ること深からざれば、底を尽くさず】

法の源底を尽くさねば、ほんものの高雅な真理は手に入らない。

只看る白雲飛んで又帰ることを

これは、本則の三長老の商量が妙峰頂を飛来するの雲の如く、無心で没もつしょうせき縦跡であることを頌じたものである。

ところが白隠悪漢は、これに繩を入れて下語。【謂うこと莫れ、無心更に無事と。又曾て楚の襄王じょうおうを愁殺す】

これは、楚の襄王が高唐に遊んだとき、夢で巫山の神女と契ったが、神女が去るに当たって、自分は朝には雲となり、夕には雨となると言ったという故事で、雲は無心どころではなく、愁いがこめられているとの意である。

さてそれでは雲の含む愁いとは一体何か？ 本則の三大老が愁いを含むというのか、もしそうであるとすればその愁いとは何の愁いか、とくと工夫すべきである。

老漢は、「評」ではこれと別に、「その千態万状、譬えば孤雲の空に浮かぶに似て、乍たちまち獣の如く、乍ち鳥の如く、或は奇峰の如く、或は傘蓋に齊しくして、全く定度無し」とし、雲の自由自在な千変万化の活機用を指摘している。

松檜蒼々幾歳をか歴たる

この妙峰頂は、余り高く峻しいので、今まで足を踏み入れた者は誰一人としておらず、何千年何万年の間 人跡未踏で、従って斧斤ふきんの入った跡もなく、松や檜はのびるにまかせ鬱蒼として昼なお暗い。

ここの下語。【果然して猿を兼ねて重く、山深くして路迷うに似たり】

これは、法眼の「円成実性」の頌の一節である。その全部をあげると「理極まり情謂を忘ず、如何んが^{ゆせい}諭齊有らん。到頭霜夜の月、任運前溪に落つ。果熟して猿を兼ねて重く、山深くして路迷うに似たり。頭を拳ぐれば残照在り、元是れ住居の西。」となる。

これが妙峰頂の山容であるか？

莫教 巖畔 鳥声の稀なることを

このような孤絶の峰頂には、鳥も飛んで到らず、獣も走って来る望を断つ。いかなる修行者も、その様子を伺うことはできず、仏祖も手脚を挟むことができない。ここは学を絶し、人を寄せつけない恐るべき境である。

ここの下語。【喜ぶときは則ち^{みだり}濫に功無きを賞し、怒るときは則ち濫に罪なきを殺す】これは、この頌に繩をいれたもので、余り賞めすぎぬのがよい。よい気になって喋ると、法に庇がつく、折角の風光が台無しになるとの拈語である。

これによって、妙峰頂の瀟洒を絶する風韻が一層生き生きとしてきた。

これはこれ、向う三軒両隣りの三間の^{ぼうおく}茅屋の風韻である。

「我ここに今かく在りぬ日向ぼこ」

著者プロフィール



^{ごつせき}白田劫石（本名 / 貴郎）

大正4年、東京生まれ。東京帝国大学倫理学科卒業。元千葉大学名誉教授。昭和11年、両忘協会立田英山老師に入門。人間禅教団第三世総裁・師家。庵号 / ^{ません}磨甌庵。平成21年2月帰寂。